

# ART project

## 国際芸術交流展&シンポジウム

### 「アートはまちをすくわない？」

富山大学芸術文化学部講師 松田 愛



芸術文化学部は平成28年11月3-7日に、文部科学省平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」事業の一環として「アートはまちをすくわない？」と題する国際芸術交流展&シンポジウムを、高岡市の国重要文化財武田家住宅で開催した。まちや地域の活性化を目的とするアートプロジェクトが全国で開催され、アートの社会的役割がますます重視される中、「アートとまちの関係」について、展覧会とシンポジウムを通じて再考することを目的とした。

武田家は、「甲斐の武田信玄の弟逍遙軒信綱（1525～1582）の子孫と伝えられており、代々太田村の肝煎（きもいり）を務めた豪農であり、約200年前に建設された肝煎住宅そのままの姿を現在に伝えている（註1）」。

武田家住宅は、高岡市の外れ、雨晴海岸からほど近い場所にあり、木々に囲まれた静かな場所に建つ〔図1〕。展覧会では、こちらの武田家住宅を舞台に、チェコの画家パトリック・ハブル氏と、富山在住の美術家西島治樹氏の二人の作家による新作を展示した。ハブル氏は、芸術文化学部が学術交流協定を結ぶプラハ美術工芸大学で絵画を教え、これまで宗教建築やプラハの路上など様々な公共空間を舞台に、自身の絵画をインスタレーションとして発表してきた。チェコを拠点にしつつ、ミュンヘン、アムステルダム、リヨン、ミラノなど各国で活躍している。本展開催にあたり、ハブル氏は武田家住宅を訪問し、そこで得たインスピレーションをもとに、富山大学芸術文化学部のキャンパスで公開制作を行った。

また本学部准教授で、本プロジェクトの共同企画者でもある西島氏は、映像・コンピュータ・自然の法則を組み合わせて、仮説として捉えた世界観を様々なメディアアート作品として発表してきた。西島氏は今回、武田家住宅と自身のルーツとの繋がりを探りながら、新作に取り組んだ。

初日のシンポジウムでは、両作家に加え、二人の方にパネリストとして加わっていただいた。ひとり、創造性、テクノロジー、社会の接点をテーマに、様々なプロジェクトを企画するキュレーターの高橋裕行氏である。

もうひとり、名古屋の港まちでアートや文化のための場所づくりに携わるアートコーディネーターの吉田有里氏である。4名の講演とディスカッションを通じて、日々の芸術文化との関わりや、芸術文化とまちとの関わりについて議論を深めた。



〔図1〕重要文化財武田家住宅（富山県高岡市） 撮影：怡土鉄夫

#### 高岡キャンパスでの公開制作

ハブル氏は、展覧会に先立ち、富山大学芸術文化学部のキャンパスで二日間にわたる滞在制作を行った。初日は一般公開を行い、多くの学生や市民の前で公開制作を行った。ハブル氏はキャンパスの床に縦10m、横1.35mの大きなロール紙を広げ、アクリル絵の具、スキージー、ローラーに代わる筒、段ボールなど、その場にある素材や道具を用いて即興で描いていった〔図2〕。

#### 武田家住宅での展覧会

展覧会では、ハブル氏が「掛け軸」と呼ぶ大型の絵画作品3点を、天井の高い会場入り口の土間に展示した〔図3〕。そのほか、各部屋の大きさと雰囲気に合わせて、大小合わせて8点の絵画を展示した〔図4、5〕。「自身が描くのは、しばしばまだ見てはいないものの、どこかで出会う風景である」とハブル氏は語っている。特に「掛け軸」と呼ばれる作品については、「絵画を通じた詩」であり、内面の風景を描いたものであると同時に、「外部の風景と直接関連しているものである」とも述べてい





〔図2〕パトリック・ハブルによる公開制作（高岡キャンパス）

る（註2）。

また、場所のもつ意味や歴史性について問いかけながら制作する西島氏は、今回武田家住宅との出会いを一つのきっかけに、自身のルーツを探りながら制作を進めた。西島氏の作品は3つのパートから成る。1つ目は、武田家住宅の「ざしき」の床の間に、武田家の家紋である四つ菱のある瓦と、木瓜（もっこう）のあしらわれた四つ菱のフロタージュ絵画が並べられ、2台のウェブカメラが至近距離からそれぞれの家紋を撮影し続けるというものである〔図6, 7〕。

2つ目のパートをなす家の中心部分「おねま」、すなわち、歴代の当主が休んだ寝室では、9台のデジタルカメラが暗闇でシャッターを切る。それらは様々な方向にレンズを向け、薄暗闇の中、おねまを訪れる人々の気配など、様々な情報を写しとる。「ざしき」で撮影された2つ



〔図4〕パトリック・ハブル《ブルー・マウンテンズ》2016年 撮影：怡土鉄夫

の家紋の情報は、「おねま」で採取された様々なデータと照合され、そこで合致した色彩の情報だけが、1分ごとに「ちゃのま」の障子をスクリーンとして再生されることになる。これら3つのパートを経て作品は完成する。

### シンポジウム「アートはまちをすくわない？」

シンポジウム当日は、70名程を想定した会場に、学生や教職員、地元の方から東京や名古屋、京都まで、県内外から134名の方々にご来場いただいた。「アートはまちをすくわない？」という本テーマに対する関心の高さを感じることができた。

シンポジウムでは、ハブル氏から、修道院や教会堂などの宗教建築、道路など様々な公共空間で行ってきた仕事を語っていただいた。抽象的な絵画空間の中で、観客がどのような体験をするのかということ、すなわち絵画と空間、人との関係性をハブル氏が最も重要視していることがよく理解できた。

西島氏は、今回の作品が自身のルーツとも関わる「消えゆく記憶」をテーマとしたプロセスアートであることを

を語った。その

上で、今回の企画者でもある西島氏は、自身はアートでまちを活性化させようとは思っていないこと、「ただ、アートがプロセスを経ていくことによって、人が絡むことによって、結局、まちと絡むことに必然的に到達する」という今回のシンポジウ



〔図3〕パトリック・ハブルによる3点の〈掛け軸〉2016年 撮影：怡土鉄夫



〔図5〕パトリック・ハブル《すみれ色の掛け軸》2016年 撮影：怡土鉄夫





【図6】西島治樹による3つの空間を使ったメディアアート作品。作品1. ざしき・とこのま-オリジナル家紋エリア 撮影：怡土鉄夫



【図7】図6の作品の部分

ムの核心へと切り込んでいった。

高橋裕行氏は「空港とアート——のと里山空港アートナイト2016より」と題し、2016年10月にのと里山空港を舞台に企画、開催したイベントについて語った。本プロジェクトは、テクノロジーを駆使して斬新な表現を試みる作家ライゾマティクスリサーチ（Rhizomatiks Research）が、のと里山空港の滑走路を使い、空港のためのプロモーションビデオを公開制作するというものであった。真夜中に近い時間に、滑走路という困難な場所で、最先端の表現に観客が立ち会う本イベントは、セキュリティ的な問題や、新し過ぎて理解されないかもしれないという様々なリスクを乗り越えて実現された。撮影終了後のトークでは、アーティストの活動の紹介とともに、今回のプロジェクトについて丁寧な説明がなされ、作家と参加者の交流の場が設けられるなど、企画に対する運営側の真摯な態度が印象であった。

高橋氏はまた、一般的なイベントにおいて、まちおこしに対する過度な期待や行政のセクショナリズムなど、アートと地域がうまくいかない原因を述べた上で、アートの側からまちを見たとき、作り手は地域活性のために作品制作を行なうのではなく、「アーティストにとって、作品を誰に、どこで、どのように見てもらうか」ということは大変重要で、そのスタンス自体が作家性であり、作品性である」と語る。

また、名古屋の港まちをフィールドにしたアートプログラムMinatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]のプログラムディレクターを務める吉田有里氏は、作家やアートマネージャーらとともに、展覧会やイベント企画、空き家対策事業などMAT, Nagoyaの様々な活動を通じて、アートとまち、アートと人々を結びつける仕事に携わってきた。今回は、その主な活動について紹介していただいた。MAT, Nagoyaは、そのステートメントで、「アートそのものは、まちを変えるためには存在していません」と語っている（註3）。そのことについて吉田氏は、「アーティストがまちを訪れることや作品を通じ

て、アートの本質である、価値観の違いや他者を受け入れていくという意識がまちに根付いていくことで、まちが良くなるだろうという希望をもって」活動していると説明した。それは、日々の活動を通じてアートとまちや人々との関係を育むこと、すなわち人々の日常の中にアートがゆっくりと浸透していくような、時間を要するプロセスである。すぐには答えの出ないものに対し、丁寧に向き合っていくことの大切さを、MAT, Nagoyaの姿勢は表しているといえる。

後半のディスカッションでは、継続することによる市民の反応の変化や、作品のクオリティを保ちつつ、まちに暮らす人々の声も聴き取っていく調整役の大切さについて、また、まちにアートが出ていくことで、作品が人々に与える影響と人々から得られるレスポンスの重要性、さらに、アートイベントに対する行政の支援についてなど、様々な議論が展開した [図8, 9]。

最後に、会場からは、イベントが終了した後の評価をどのように行なっているのかとの質問があがった。評価において重要なのは、最初に目標を定め、それがどこまで達成されたのかを検証することである。しかし、高橋氏も語るように、実際に取り組んでみてどうなるかという未知数な部分もある。誰に、何を残せたのかは、来場者数などの数字で測ることは難しい。「アートはまちをすくわない？」との問いに対する答えも、アートがまちや人々にもたらす変化とその可能性を、長期的展望のもとに見つめ続けることから見えてくるのではないだろうか。

#### 謝辞

本国際芸術交流展&シンポジウムの開催にあたり、多大なご協力を賜りました高岡市や高岡市教育委員会、高岡市太田の地元の皆様、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

註1）高岡市公式ホームページより。



【図8, 9】シンポジウム「アートはまちをすくわない？」のパネルディスカッション

<https://www.city.takaoka.toyama.jp/syoubun/kanko/rekishi/yuke/takedake.html>  
(2017年9月6日閲覧)

註2) ハブル氏への筆者によるメールでのインタビューより。

註3) MAT, Nagoyaの公式サイトを参照のこと。

<http://www.mat-nagoya.jp/about>  
(2017年9月6日閲覧)

#### ■概要

文部科学省平成28年度科学技術人材育成費補助事業  
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」  
国際芸術交流展&シンポジウム「アートはまちをすくわない？」

国際芸術交流展：平成28年11月3日(木・祝)-7日(月)  
9:00-16:30

シンポジウム：平成28年11月3日(木・祝) 14:00-16:30

会 場：重要文化財武田家住宅(富山県高岡市太田)

主 催：国立大学法人富山大学芸術文化学部

後 援：高岡市・高岡市教育委員会

企 画：松田愛(富山大学芸術文化学部講師)

西島治樹(富山大学芸術文化学部准教授)

グラフィックデザイン：佐藤隆弘

パトリック・ハブル氏による公開制作：10月29日  
(土)・30日(日) [一般公開：10月29日(土) 14:00-  
16:00 富山大学芸術文化学部 エントランスホール]

国際芸術交流展「アートはまちをすくわない？」  
—パトリック・ハブル×西島治樹—

シンポジウム「アートはまちをすくわない？」  
[プログラム]

第1部・講演 14:00-15:30

①パトリック・ハブル「公共空間の中の絵画」

②西島治樹「武田家での制作」

③高橋裕行「空港とアート——のと里山空港アートナイト2016より」

④吉田有里「アートとまち——Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya] の活動」

第2部・パネルディスカッション 15:45-16:30

モデレーター：松田愛

#### ■関連企画：芸文ギャラリーでのプレ展覧会

「アートはまちをすくわない？——映像で見る二人展  
パトリック・ハブル×西島治樹」

上記の国際芸術交流展&シンポジウムの広報を目的とするプレ展覧会を、10月4-10日の期間に、高岡市御旅屋町にある芸文ギャラリーで開催した【図10】。プレ展覧会では、パトリック・ハブル氏と、西島治樹氏のこれまでの制作活動について、映像作品及びドキュメント映像、平面作品を通じて紹介した。また、パネル展示を通して、国際芸術交流展&シンポジウムの企画趣旨の説明、及びパネリストの高橋裕行氏と吉田有里氏の紹介、会場となる武田家住宅の紹介を行った。

会 期：10月4日(火)-10日(月・祝) 11:00-19:00

会 場：芸文ギャラリー(富山県高岡市御旅屋町)



【図10】芸文ギャラリーでの展示風景